

幕末から終戦まで、木戸孝允と木戸幸一を中心に、

芳野健二

A、はじめに

大震災という天災と、収斂定かならざる原発事故という人災に苦しむ今、150年の我が国の歴史を、幕末・維新（陰を伴った成功例）と昭和の15年戦争（完全な失敗例）という二つのピークを振り返ってみるのも意義あることではないでしょうか。

前者では、ペリー来航という天災（？）と、対応不可なる幕藩体制という人災、後者では、関東大震災という天災（その後の不況）と、軍閥跋扈という人災、それらに人々がどう対応したかを、二人の木戸、孝允と幸一（戸籍上の孫）を中心に鳥瞰してみたい。

二人の政治的立ち位置が、時の権力者たる大久保らや東条らに対する、あるときは協力者、あるときは厳しい批判者として共通であり、ともに若き明治帝と昭和帝とに厚い信頼を得ていたことも共通する。

B、二人の木戸、孝允と幸一

1、性格、

孝允はロマンチストで悩み多き男で、逃げる、すねる、時には何もかもいやになって投げ出す。そして深く反省する。悩みがこうじて44歳で亡くなる。幸一は折り紙付きのリアリストで、戦局困難なる時も、東京裁判のときも巢鴨のなかでも、つねにマイペースで現実と折り合いをつけ着実に対応する。深い反省とは無縁で、おかげで孝允の二倍の人生を送った（89歳）。

2、風貌、

孝允はきりっとした快男児であり、女性や若者に人気があったようだ。例えば龍馬の木戸評「胆あり、識あり、思慮周密、廟堂人なり」。アーネスト・サトウの評「軍事的、政治的に最大の勇氣と決意を心底に蔵し、態度が温和で、もの柔らか」と。

幸一は身長152センチのいささか風采の上がらぬ人物で、性格的にもエゴイストとして嫌われる面があった。例えば徳富蘇峰の評「実に虎の威を借りる狐であり、彼ほどの奸物は明治以来いまだなし」と。

3、家族、ともに愛妻家。孝允の芸者幾松、のちの妻松子とのラブロマンスはつとに有名であるが、子を成すこともなく、後半はノイローゼ気味で松子を困らせたようである。彼の死後、彼女は剃髪している。幕末の逃避行中の出石滞在中に女子を得たようだが、この子は歴史からは消えている。

幸一の妻は児玉源太郎の四女で、三人の子に恵まれ、長男孝彦は弁護士として東京裁判の弁護士の一人となる。

4、趣味、

孝允はまじめ人間で、国家のグランドデザインを描くことが“趣味”ともいえるのではないかなあ。

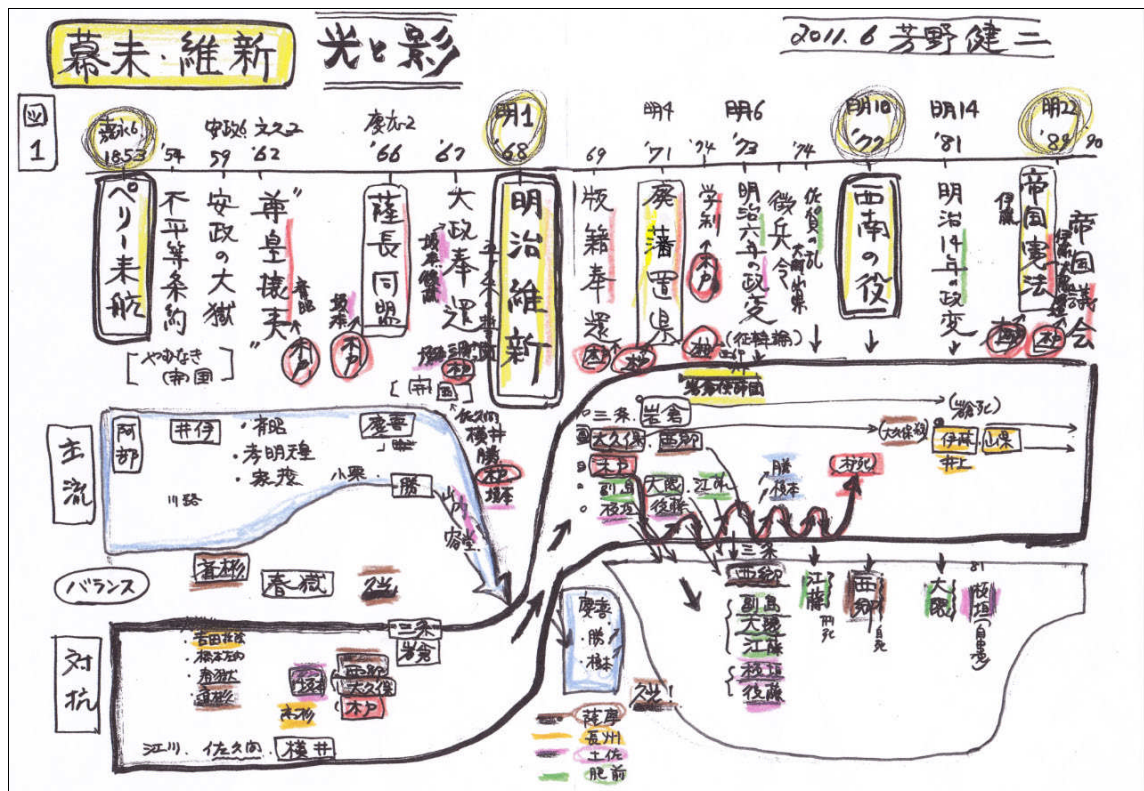
幸一は多趣味で、戦前熱を入れたのがゴルフで、月に10回は出かけ、ハンデいは10まで進んだが戦争で中断。戦後巢鴨の獄中では仲間と楽しくトランプに興じた。

また二人の共通の趣味といえるのが日記であり、孝允のそれは感情を率直に表しているおもしろい。幸一の日記は東京裁判の重要資料ともなった実に精緻なものである。

C、木戸孝允

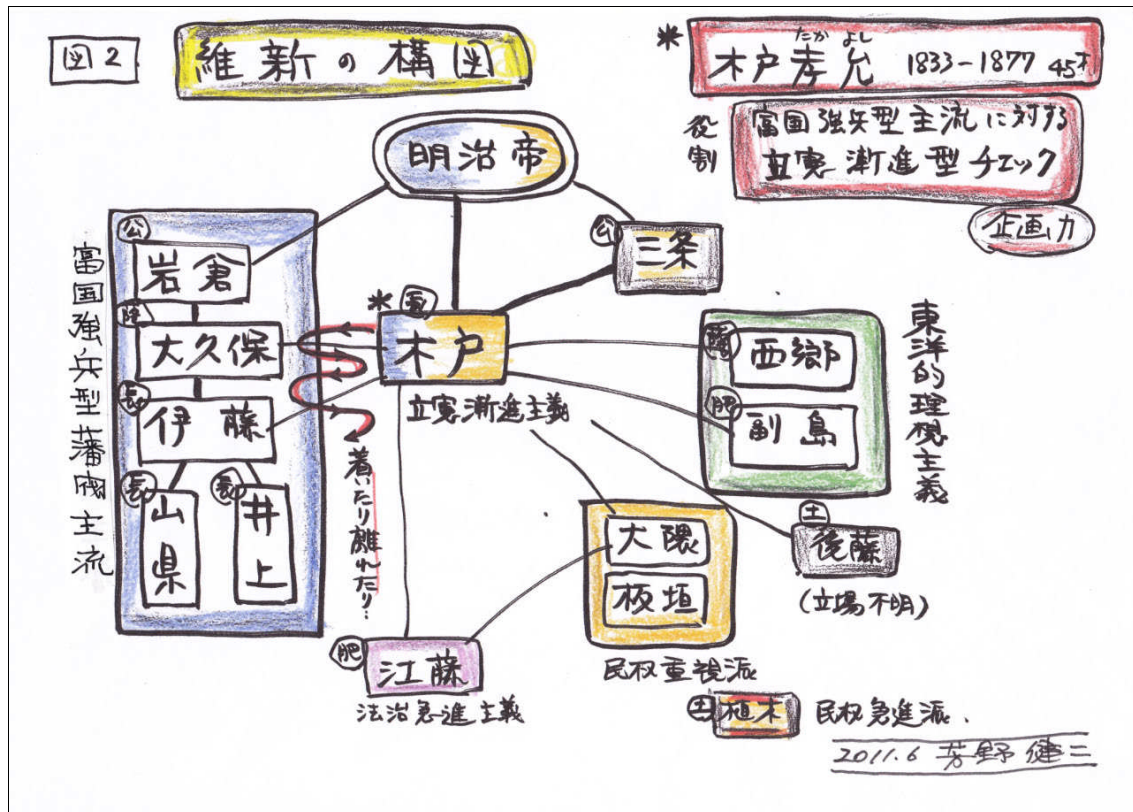
1、幕末・維新の出来事と彼の役割

彼の活躍した幕末・維新の出来事と、それをとりまく人脈の“主流”と“対抗”を図示すれば、図1「幕末・維新—光と影」であり、「尊王攘夷」「薩長同盟」「五ヶ条の誓文」「版籍奉還」「廃藩置県」「教育」「征韓論（これには彼の盟友、対馬藩の大島の影響が大）」さらに彼の死後日の目をみる「憲法制定」「国会開設」といったおおきな施策が、彼の企画力で成り立っていることに驚く。ただし遂行する気力と体力には欠けていたといわねばならない。一方、「殖産興業」「徴兵制」に対する関心はうすかったようだ。



2、維新の立ち位置

複雑にして変転きわまりない明治維新の主役たちの立ち位置は、図2「維新の構図」のように理解され、彼の役割は優れた企画力と、富国強兵型主流に対抗する立憲漸進型のチェック機能にあったといえるのではないか。



3、木戸孝允日記

岩倉使節とともに欧米の旅にあった彼の日記から、彼の生真面目な性格と感情をよみとってみると、

(1)「根本たる法律（憲法）が定まらずんばあるべからず。何（礼之書記官）にその意味を申達せり」

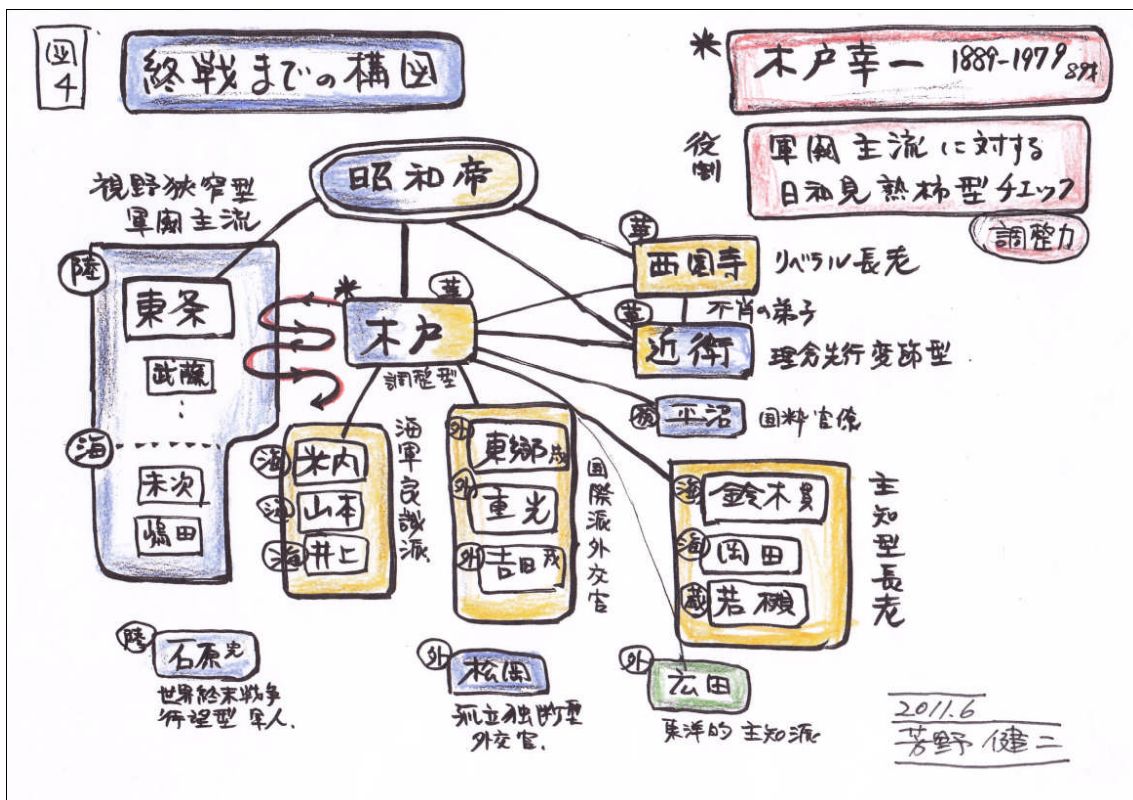
(2)「にわかにな久保、伊藤が帰朝して、この行動を悔ゆ」「みだりに森、伊藤の唱えしところ、益少し。功名をあせるの弊がなきにしもあらず。」「才子の一時求名の説を看破せざるときは、国家の事もまた危うし」

「我が国を愛し、我が人民を思う者、あに深憂せざるべけんや。想像して十年後を懸念し、夜白む」

(3)「兵力をもって、かの国（朝鮮）を開かざるを得ず、外に一事を生ずるときは内地の進歩も大いにすみやかなるのあらんと。」

2、終戦までの立ち位置

図4「終戦までの構図」のように、昭和天皇の側近として自分を極力”影”“無”と意識しつつ、軍閥主流や対抗する各勢力と接点を持ちながら調整力に力量をみせたといえよう。ロンドン在住の横浜正金銀行の加納久朗からの的確な情報、助言にも耳を傾けているが、残念ながらそれを有効な施策にする力量はなかったといわねばならない。重光葵とは、戦中戦後、巣鴨の中でも互いの意を交わしたようだ。



3、木戸幸一日記

昭和5年から巣鴨獄中の昭和23年までつづく彼の緻密な日記は政治史の研究材料として貴重であるが、見方を変えれば永井荷風の『断腸亭日乗』に匹敵する昭和世相史の貴重な資料でもある。彼の生真面目な性格と当時の状況をよみとつてみると、

(1) 昭和15年5月「西田、田辺博士の哲学書、周仏海の三民主義講義等を求む」(京都帝大をでた彼には哲学青年の残滓があったようだ)

「井上侯、細川侯らと朝霞でゴルフ」(まだゴルフに興ずるゆとりがあったようだ)(彼のゴルフは堅実なボギーゴルフでパートナーにはつまらなかったようだ)

(2) 昭和15年7月「(天皇の)ご感想、『ソ連と米のみ傷まずして他の列強は皆疲労すること疑いなし。臥薪嘗胆の十年を覚悟し、』

(3) 昭和16年10月「近衛公は容易に決意しない。陸軍大臣(東条)は開戦決意を強く主張し」

そして戦争は始まった。

(4) 昭和19年3月「孝允公伝を再読、当時極めて緊迫せる情勢下において公のとられたる御心事、御態度、今日の情勢に照らし感銘深きものあり、以て亀鑑とすべきものすくなからず。」

(5) 昭和20年8月29日「(天皇の)御話、『自分が一人(責任を)引き受けて退位でもして納める訳にはいかないだろうか、』

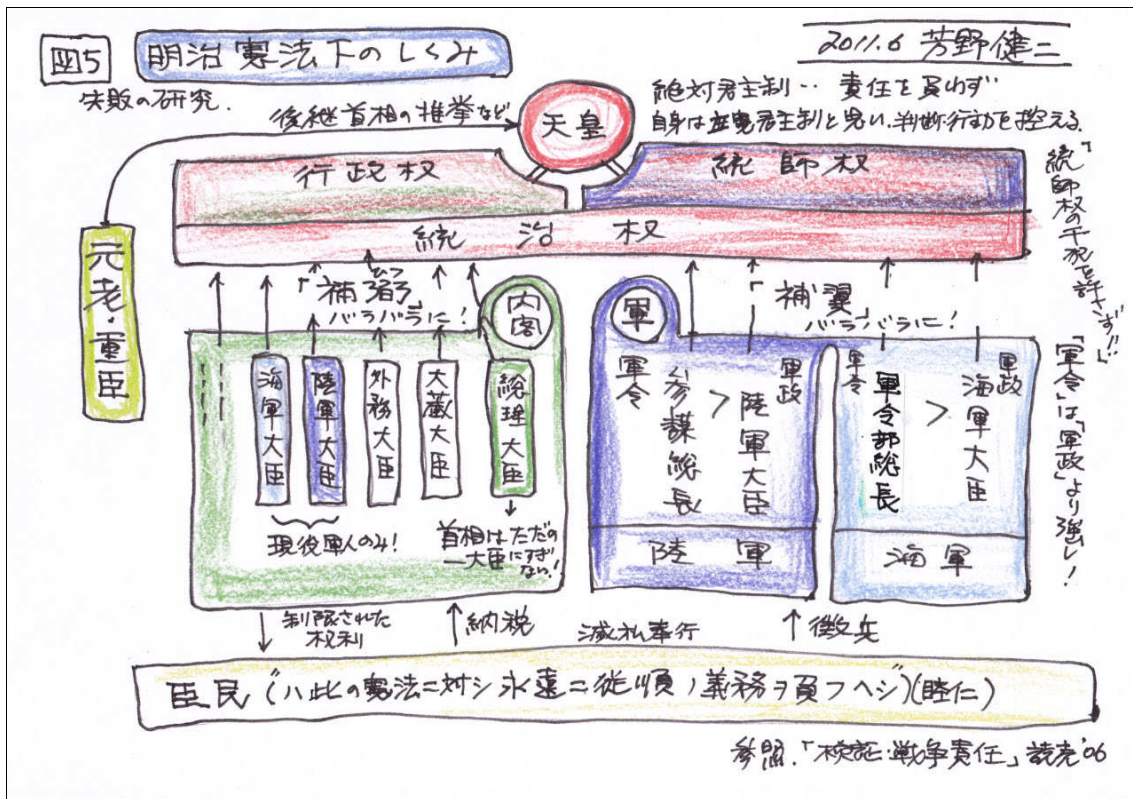
4、東京裁判

天皇の免責を立証しようとする彼の努力は、膨大な『木戸幸一日記』の提出や、優秀なアメリカ人弁護士ローガンの助けをかりた反証など、裁判史上の圧巻といえる。もちろんパール博士の無罪論や清瀬一郎の総合弁論も見事だった。東条の天皇に関する失言(本音)をキーナンや松平の要請をうけて説得、撤回させたのも彼である。

E、まとめ、二人をつなぐもの

孝允は誠実な理想主義的合理主義者であり、国の骨格造りに邁進し、志なかばで病死したが、国の基本設計図たる憲法制定にも、米欧回覧中から並々ならぬ意欲をもやしていた。彼の死後、不肖の後輩にしてオポチュニストの伊藤博文を中心につくられた明治憲法は、図5「明治憲法下のしくみ」にみられるように、各権力、責任がバラバラないびつな設計図であった。一説には、天皇中心に対する第三、第四の幕府が生まれることを恐れたためだという。世界列強と国民を忘れた内輪の論理優先の愚作というべきか。

彼の孫 幸一はその悪しき設計図からほころび出るトラブルに巻きこまれつづけ、パッチあてに終始し、遂に国の滅亡に立ち会う運命となった。初代が築いた基礎を三代目が喰いつぶすという図式がここでもあてはまるのだが、果たして今日、戦後からの三代目が担う日本の将来は如何に?!



F, 参考文献

木戸孝允

- 1、「木戸孝允日記」世界ノンフィクション全集、50、筑摩書房
- 2、「醒めた炎」村松剛 中央公論
- 3、「木戸孝允」松尾正人 吉川引文館
- 4、「木戸孝允」大江志乃夫 中公新書
- 5、「岩倉使節団の旅、白い崖をたずねて、木戸孝允のみたイギリス」宮永孝 集英社
- 6、「明治新政権の権力構造」福地惇 吉川引文館
- 7、「明治維新の再発見」毛利敏彦 吉川引文館
- 8、「一外交官のみた明治維新」アーネスト・サトウ 岩波文庫
- 9、「幾松という女」南条範夫 新潮社

木戸幸一

- 1、「木戸幸一日記」全4巻 東大出版会
- 2、「決断した男、木戸幸一の昭和」多田井喜生 文芸春秋
- 3、「近衛日記」共同通信社
- 4、「徳富蘇峰終戦日記」講談社
- 5、「検証、戦争責任」